

全学共通教育「日本語」「日本事情」

「日本語」 日本語 1、日本語 2、日本語 3、日本語 4

平成 17 年度の共通教育の「日本語・日本事情」は以下のようであった。

コーディネーター

大石寧子

日本語 I [前期]

人数： 21 名（中国 19 名、ウイグル 1 名、ベトナム 1 名）

使用教材： 『大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』佐々木瑞枝他(2001)
The Japan Times

本講義では、テキストを中心に各課のテーマを扱いながら進めていった。授業の流れとしては、まず課ごとにテーマに関する予備知識を確認し、新出語彙を説明した後、ロールプレイや聴解問題、読解、要約、作文などの練習に入るという流れである。授業の方針としては、留学生が大学で生活していく上で必要な日本語力を身につけることを目標とし、大学での様々な場面に対応できるように、実際に遭遇するだろうと思われる場面を設定して練習を行った。また、テキストに沿った授業だけでは現在の生の情報が取り入れにくくなる。そのため、テキストに加え、最近の時事問題を紹介した。時事問題のテーマは大学で学ぶ留学生として知っておいたほうがいいと思われるものを選び、時事問題の内容によっては日本語で意見交換をする時間を設けた。

日本語 I [後期]

人数 13 名（中国 11 名、韓国 2 名）

使用教材： 『大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』佐々木瑞枝他(2001)
The Japan Times

本講義では、テキストを中心に各課のテーマを扱いながら進めていった。授業の流れとしては、まず課ごとにテーマに関する予備知識を確認し、新出語彙を説明した後、スピーチやレジュメ作り、ディベートなどの実践的な練習に入るという流れである。授業の方針としては、留学生が大学生として生活していく上で必要な日本語力を身につけ、大学での様々な場面に対応できるようになることを到達目標とした。そのために、実際の講義やゼミでの演習などを想定しながら、より実践的な作業を取り入れた。実施する際の工夫としては、知識としての日本語ではなく、学んだことを実際の場面で生かせるように、様々な場면을模擬体験し、フィードバックする機会をできるだけ多くした。

日本語 2【前期】

人数： 15 人(中国 13 人, 韓国1人, ベトナム1人 / 男性9名, 女性6名)

使用教材： 『改訂版留学生のための論理的な文章の書き方』二通伸子・佐藤不二子
(2003)スリーエーネットワーク

日本語の作文力(書く力:アカデミックな書き及びコミュニケーションのための書き)を伸ばすことを目標に、語彙・表現練習、書き言葉の練習、資料の読解、意見交換、論理的な文章を書く練習、e-mail の書き方、日記公開(インターネットの blog 機能を利用)等を行った。評価は授業参加度、宿題、中間試験、期末試験により行った。

日本語 2【後期】

人数： 11 人(中国7人, 韓国2人, アメリカ2人 / 男性5名, 女性6名)

使用教材： 『改訂版留学生のための論理的な文章の書き方』二通伸子・佐藤不二子
(2003)スリーエーネットワーク

日本語の作文力(書く力:アカデミックな書き及びコミュニケーションのための書き)を伸ばすことを目標に、語彙・表現練習、書き言葉の練習、資料の読解、意見交換、論理的な文章を書く練習、レポート作成(資料探し、テーマ発表、アウトライン発表、ドラフト提出、レポート提出)、e-mail の書き方等を行った。評価は授業参加度、宿題、中間試験、最終レポートにより行った。

日本語 3【前期】

人数： 8 名(中国 4 名 韓国 4 名)

使用教材： 新聞記事、書籍より抜粋、料理レシピ

速読の練習とその実践(論理的な文章、新聞記事、料理のレシピなどを使用)。日本語で書かれた資料から、早く必要な情報を得るため、クラス内で説明、練習、実践と段階を追って行った。内容のある文章から、時刻表やレシピのような限定された情報まで様々なタイプの日本語に触れるようにした。評価は、クラス活動で作成した内容要約メモやレポート、宿題の提出状況より行った。

日本語3[後期]

人数： 6名(中国1名 韓国2名 アメリカ3名)

使用教材： 各自のテーマに添った書籍

テーマに沿って自分で資料を調査、収集しプレゼンテーションで発表する。プレゼンテーションは各学生2回行った。1回目は教員の指定したテーマに沿って、図書館やインターネットを利用して情報を収集し、各自の工夫で発表した。2回目は、「私の薦める〇〇」というテーマで、各自がテーマを自由に設定して行った。

この授業に先立ち、附属図書館の協力を得て、文献検索ガイダンスを実施していただいた。評価は、プレゼンテーションの構成、日本語力、最終レポートではプレゼンテーション時の指摘にどう対応したかを重視して行った。

日本語4[前期]

人数 7名(中国3名 韓国3名 マレーシア1名)

使用教材： 生教材「NHK あしたをつかめ」及びそれに関する自主作成教材

「日本語4」では、四技能の向上を目指すと共に、特に「話す・聞く」の力を伸ばすことを目標とした。前期は、これまで身に付けてきた自分の日本語力や話し方を振り返り、改善すべき点、補う点を見つけるため、教材は、余裕をもって臨めるものにした。NHK

「あしたをつかめ」の4編を使用した。各回の大まかな流れは、①初見で、全体の把握及び中心となる人物の話し方分析②語彙・表現の獲得③そのテーマについて調べ、自分の意見の発表である。①は、初見で、今回のテーマは何か、主張点、問題点は何か、登場人物のそれぞれの主張は、ということが的確につかめるか。また、登場人物の中で誰の話し方がいいか、それはどうしてか、声の大きさ、強さ、話の展開、顔の表情等も皆で検討する。②は、配付された語彙・表現リストを各自で調べ、翌週語彙クイズを実施。また新出の文型・表現については、宿題とし、翌週のクラスで発表し、皆で評価する。③その回のテーマについて、自分の意見や自国との比較などを発表したり、地域の人々や日本人学生達に行った聞き取りをまとめて発表したりした。

日本語4[後期]

人数： 7名(中国5名 韓国1名 マレーシア1名)

使用教材： 生教材「NHK クローズアップ現代」

前期と同様に四技能の向上を目指すと共に、特に「話す・聞く」の力を伸ばすことを目標

とした。後期は、前期の日常生活についてのテーマや語彙から少しレベルアップを図り、今話題になっているテーマや語彙の獲得を目指し、NHK「クローズアップ現代」の中から3編を使用した。各回の流れは、①初見で、全体の把握及び中心となる人物の話仕方分析②語彙・表現の獲得③そのテーマについて調べ、自分の意見の発表である。②に関しては、そのテーマの背景となる状況、機関、用語、例えば「総合学習とは」「NPOとは」などを各自で調べて発表し、語彙の獲得と共に発表の際の話し方の練習も行った。

日本事情Ⅰ【前期】

人数： 11名（中国 6名、韓国 4名、ベトナム 1名）

使用教材： ・「過渡期の日本を考える」三巻陽子他（1997）凡人社 より抜粋
・新聞記事

メインテーマを「日本・日本人を知る」とし、最終的には、小グループに分かれてテーマを決め、調査し、発表をするプロジェクトワークとした。前半は、基礎的な知識や情報を得るため、用意した教科書の抜粋や新聞記事を使用し、テーマについてクラスでのディスカッションや自国との比較などを中心として行なった。後半は、グループに分かれて調査テーマを決め、作業や調査を行い、毎回各グループの進捗状況を報告し、共通作業として「アンケート」の作成、集計の方法を学ぶ。また、地域や日本人学生に各自のテーマについて聞き取り調査も行なう。最終的に地域・日本人学生を前に発表を行なった。発表テーマは以下のようである。

- ① 日本の温泉
- ② 行事の料理「お正月料理」-韓国との比較
- ③ 日本のラーメン
- ④ 日本の大学生の生活 -韓中稲越との比較

日本事情Ⅱ【後期】

人数： 12名（中国 8名、アメリカ 4名、韓国 1名）

使用教材： 「日本語であそぼ」

文化差を相対主義的な観点から見直すためのエクササイズおよび講義を実施した。具体的には、

- (1) 文化差とステレオタイプのメカニズム、
- (2) ステレオタイプに対する対応方法、(3)

異文化とのチームビルディング、をテーマに授業を展開した。また、日本文化の理解を促すために、「日本語であそぼ」を基に文化生活面の解説なども行った。

日本事情Ⅲ[前期]

人数： 16名(中国 11名、米国 3名、韓国 1名、ベトナム 1名)

使用教材： 自主教材および新聞記事

現代日本の課題や問題を取り扱うために新聞を基に授業を展開した。取り扱ったテーマは多岐に渡り、例えば「幼児虐待」、「建築偽装事件」、「日本の教育システム」などについて解説およびディスカッションを展開した。また、課題として毎授業の感想を提出させ、学生の作文指導も行った。

日本事情Ⅳ[後期]

人数： 6名(中国 3名、韓国 2名、ベトナム 1名)

使用教材： ・テーマに関連した書籍より抜粋

例：「川と人間－吉野川流域史－」 平井松午 (1998) 溪水社

「徳島県の民話 日本児童文学者協会編」

他

・ゲストスピーカーによる作成教材

メインテーマを「徳島を知る－吉野川を通して」とする。徳島のシンボルである吉野川について、いろいろな視点からのゲストスピーカーの講義を受けると共に、自分達のテーマを決め、調査し、最終的に発表を行なった。ゲストスピーカーによる講義は、①「吉野川概要」国土交通省・野町 浩②「吉野川と農業」農業大学校・野田靖之③「第十堰問題について」姫野雅義④「公共事業を環境共生型に変える方法－徳島県の例を中心に」徳島大学・中嶋信であった。また、地域・学生サポーターに「吉野川の思い出」について聞き取り調査を行なった。学生達の発表は、以下のようである。

- ① 吉野川の洪水
- ② 第十堰について
- ③ 阿波の藍
- ④ 住民が思う吉野川と洪水
- ⑤ 吉野川の農業
- ⑥ 吉野川とナットン川の住民運動の比較